

ネパール地震 40万人首都脱出

【カトマンズ共同＝高山裕康】「切符をよこせ」。怒号が飛び交い、われ先にバスの屋根に駆け上がる。ネパール大地震で壊滅的被害を受けた首都カトマンズから地方に逃れる住民が相次いでいる。続く余震、水不足、感染症の懸念…。「街が怖い」。先を争い暴徒化する被災者も。既に40万人超が脱出。人口約100万人の約半数が首都から姿を消した。(1面関連)

「無能な政府を倒せ」。29日、空港近くで政府が用意した無料のバスを待つ人々から叫び声が上がった。小雨の中、数千人が並ぶが、大半が乗れず、一部は暴徒化して警察と衝突。道路を封鎖しバスの窓をたたいた。行列していた学生カラン・ワグレさん(20)は「感染症が怖い。友達のみな街を離れた」。首都西方ゴルカの自宅が全壊したと聞き、帰宅を急ぐブミ・アムカイさん(29)も「切符の値段は3倍に上がったのに乗れない」と頭を抱える。

郊外の検問所には、4、5時間待ちの渋滞が発生。出発したバスの大半は首都に戻らず、わずかな地方行

余震、水不足、感染症 「街が怖い」

きのバスに被災者が殺到。いずれもすし詰め状態で、屋根も人が埋め尽くす。警察幹部は「首都では感

カトマンズ警察によると25日の地震発生以降、市民が続々と市内を離れ始めた。警察幹部は「首都では感



29日、ネパールの首都カトマンズを離れる人たちを乗せたバスで混み合う道路 (AP共同)

染症の流行に加え、水や食料が枯渇するとのうわさが出ている」と指摘する。

水質悪化などで地震前から飲料水の調達が難しく、住民の多くは給水車に頼ってきた。だが、地震で給水作業員が避難し、道路も寸断され、大半の給水車が活動を止めた。余震による建物崩壊を懸念して多くの人が屋外で寝泊まりし、衛生状態の悪化も懸念される。地方の被災状況ははっきりしないが、ビルが少ない地方は比較的安全だと希望を持つ人が多い。

「もう1日半も待っているのに切符が買えない」。カトマンズ北部のバスターミナルでも主婦トリシュナ・シャヒさん(37)が途方に暮れていた。家族が住む西部ネパールは千人以上の被災者が埋め尽くし、バスは数台しかない。

自宅が半壊し、水も食料もなくインスタントラーメンをかじって生きながらえた。余震を恐れ広場で眠る。「死体があちこち。感染症から逃げたい」と涙を浮かべる。「世界中から救援隊が到着しているのに、誰も私たちを助けてくれない」と大声を上げた。

医師ら追加派遣

A M D A

国際医療ボランティアA M D A(岡山市北区伊福町)は29日、ネパール大地震の被災地で緊急医療支援活動を行うため、医師の山本太郎さん(51)＝長崎県在住、看護師の神田貴絵さん(39)＝バン格拉デシュ在住＝を派遣した。26日に出発した看護師ら2人に続く第2陣。首都カトマンズ近郊に開設した仮設診療所を拠点に活動する予定。

一方、A M D Aは活動費を賄うため、5月1日正午から約1時間、岡山市北区本町の岡山高島屋前で街頭募金を行う。郵便振替(口座番号012501240709、口座名・特定非営利活動法人アムダ)でも受け付ける。問い合わせはA M D Aボランティアセンター(086-252-7700)。(岸研一)